

野に仏・里に仏

大谷 眞

第二回目の旅・その一

お接待は誰のため？

1994年4月29日

晴れ後曇り

朝4時半起床。5時過ぎの始発に乗って難波へ。難波で和歌山港行き急行に乗る。区切り打ち、第二回目のスタート。前回から二十日あまりが経過している。

今回は前回の魔法瓶の替わりに、固形燃料とコッヘルを持って行くことにした。軽量テントも入れた。前回、最後の日に会った歩き遍路の二人に感化され、機会があればテント泊も試みてみよう、との意図だ。テントの替わりに、前回不要だと思われた荷物を随分減らしたつもりが、秤にかけると、やはり12キロあまりあった。これでは前と変わらぬ。5日間の教訓も、喉元過ぎればなんとやら、といいつつとか。豆に悩まされた靴も、もつと

柔らかな靴への交換も考えたが、結局、荷物の重さへの不安が残り、また同じものを使用することにした。その代わり、よりクッション性の高い靴下を履くことにした。

和歌山港に着いた後、10分程の連絡でフェリーは出港した。祭日とあって満員である。午前9時25分、小松島港に到着。

今回のスタートをどこから始めるかまだ迷っていた。第十八番恩山寺はここからすぐ近くだ。しかし前回打ち終えた井戸寺から歩くとすれば、フェリー乗り場からJR「南小松島」駅まで行き、そこから「徳島」に出て乗り換え、さらに前回店じまいをした「府中」駅まで戻らねばならない。おまけに、まったくその逆のコースを、ほぼ一日がか

りで歩いて帰って来るのだ……。悩みながら連絡バス乗り場へ向かうと、「徳島」行きのバスがまさに出るところだった。えい！と決心し、このバスにあわてて飛び乗った。

11時半頃、府中「駅」に着く。白衣に着替え、駅を出た。井戸寺から恩山寺へのルートがわからず、井戸寺へ向かいながら標識を探していると、寺の手前でやっと見つけた。この地点から、来た方向に引き返す。標識の指し示す細い道は、地区の家々の間を抜け、やがて徳島に向かう国道192号線に出た。片道3車線の広い道だ。

徳島の市街に入り、小松島方面に右折する手前で、二人づれの老婦人が向かいからやって来た。にこにこしながら、まっすぐ私のほうにやって来る。

「お四国、お参りされてるの？」

「はい。」

一応、お遍路の格好はしてるつもりだが、と思いつつ答えると、

「じゃ、はいーお接待。」

婦人の一人がいきなり手に百円玉を握らせてくれた。これには驚いて、

「あ、あの、お接待いだけるほど、私は信心深くはないんですけど・・・。」と、あわてて返そうとする、

「私は、お大師さんに差し上げるのだから、それでもかまわないのよ。」

「いいから、いいから、ただいとおきなさい。」と、もう一人の婦人も加勢する。かなり後ろめたい気もするが、受け取らねば彼女たちも気が収まらない様子だ。しかたな

く、ありがたく両の手にのせていただいた。

しかしお接待という風習があることは知っていたが、私「とき、お遍路もどき」にもいただけとは思わなかった。とにかく受け取ったのは私だが、やっぱりこのお金はお大師さんのもの、そう考えて、ずだ袋の隅に大切にしまった。

この先、小松島への道を右折してから標識を見失い、市街地のど真ん中で迷ってしまった。近くの店に飛び込み、道をたずねると、ずいぶん東に

ずれていたようだ。小松島に向かう「徳島南バイパス」への近道を教えてもらい、このバイパスに出てから、あとは片道3車線の広い道をひたすら歩いた。途中、「小松島ユースホステル」を電話で予約し、4時過ぎ無事到着した。やはり舗装道は足にこたえた。

ユースは古い民家を利用した大部屋だった。ひとり日記をつけていると、同宿の仲間が次々にやってきた。さながら資料で読んだ『遍路宿』風になっ



てきた。ただし、お遍路（もどき、だが）は私一人。今日の仲間は、東京のライダー（昨夜寝ずに東京からぶっ飛ばしてきたそう。だ。早々に近くの温泉に行ってしまう）、チャリダー（自転車旅行者をこう呼ぶそうだ）、電車とバスを乗り継いであちこち旅をしているという男（夕食後、お酒とスルメをちびちびやっていて、布団を敷く段になってひっくりかえし、大騒ぎをする）、最後の一人は車で旅行中と言う無口な優男、とまったくバラバラな手段で旅をする仲間が期せずして集まってしまった。ユースらしい夕食後、一人ずつ風呂に入った。8時にはライダーがうとうと舟を漕ぎ始めたので、声をかけ、皆で布団を敷いた。私も床に入り、すぐ眠りに落ちた。

4月30日 晴れ

昨夜は何度も目が覚めた。疲れているので寝付きは良いが、寝る時間が早すぎて、体が面食らっているのかもしれない。

朝食後、みんなに挨拶して一番に宿を出る。R「南小松島」駅の踏切を渡ろうとすると、近所の人達とおしゃべりしていた老婦人に呼び止められた。

「お遍路さん！ちょっと待ってて。お接待させていただきますいな。」

あわてて路地の奥に駆け込み、息を弾ませて帰ってきた彼女は、私の手に百円玉を握らせてくれた。昨日と言い、今朝と言い、どうもお金をいただくのには抵抗がある。信心深い人をだましているような後ろめたさを感じるのだ。本当に信心からお遍路をされている人ならともかく、私のように中途半端な人間では申し訳ないことこの上ない。「そのお姿だけで、私にはお大師さまと一緒にどうか受け取って下さいな。」

まだためらっている私に、婦人はにこにこ言う。自分もまた、八回もお四国を回られたとのこと。「若ければ、あなたみたいに歩いてお参りしてみたいんだけどねえ・・・。」

そうか、彼女は私に夢を託しているのかもしれない。お接待をいただく事で、彼女の想いの一端でも担えるなら、それが私のような「お遍路もどき」にもできる功德かも知れない、そう思い直し、一礼してありがたくいただくことにした。やたら重たく感じる百円玉ひとつ、またずだ袋の隅に大切にしまい込んだ。

車と通学の朝のラッシュを抜け、バイパスを交差し、山手に歩いて30分ほどで第十八番恩寺の山門に出た。ただしこの山門、道の側に忘れられたようにポツンとある。すぐ横に車道が通ってから、山門の用をたさなくなったらしい。ここから少し登ると境内に出た。お参りを済ませ、ザックを置いて納経所へ行く。二人の着物の婦人が忙しく対応されていた。さらさらと達筆で記帳していただく。

ちょっと一息ついてからザックを背に境内を出ようすると、後ろから小走りにやってくる人の気



配がした。振り向くと、先
程記帳していただいた婦
人だった。

「お歩きでお参りされてい
るとは知りませんでした
ので、納経代をいただい
てしまいました。これは
お返し致します。」

差し出された両の手の
ひらには、先程支払った
三百円と、納経所で見か
けたお守りのキーホル
ダーが光っていた。何と
答えたら良いのやら、と、
うつろたえる私に、

「どうか道中、お気をつけ
てお参りください。」
と、手を合わされ、また足

早に戻っていかれた。両
手にいただいたまま、私
もその後ろ姿に一礼した。

お守りのメダルには、お
大師さんのレリーフが刻
まれている。何やら熱い
ものが、じわりと心に沸
き上がった。誰もがさり
げなく見守っている、た
だ思いつきで始めた、こ
んな不信心な「お遍路も
どき」を、そつと陰から応
援してくれている、そう
思ったとき、急に鼻の奥
がつんときた。

このあと、第十九番立
江寺でも清掃奉仕の夫人

から缶ジューズをいただ
いた。これはお大師さん
には飲めないから、と私
がありがたくいただくこ
とにした。立江寺を出て
から、そつだ、いただいた
方たちのことを、ちゃん
と記録しておかねば、と
気づき、道の真ん中であ
わててメモしていると、
後ろで声がした。振り向
くと、老婦人が追い越し
ざまに、

「はい、お接待!」

と、手に百円玉を握らせ
てくれた。あまりの抜き
打ちに、お礼も満足に言
えない私に、

「未成年生まれの78歳、私の分もお参りしておいてね！」
と、からりと言い残し、近くのスーパ―に消えてしまった。立て続けのお接待に、小心者の私はかなりこたえた。

立江寺から第二十番鶴林寺までは14キロほどの道のりとなる。荷物の重さと、季節外れの暑さのせいで、そろそろばて始めた。喉が渇き、自動販売機ばかりが目についてしまふ。鶴林寺への登り口からは山道となり、痛んだ足の具合いもずいぶん楽になった。途中「水呑大師」とある水場で生き返り、さらに登りつめると鶴林寺に着いた。山深く、樹々に囲まれた心地よいお寺だ。お参りを済ませ、納経所で次の太竜寺に向かう旧遍路道を教えていただく。

うつそうとした山道を下りながら、時刻が気になった。先の鶴林寺への上り口で見た「四国の道」の案内板では、この先下りきった所にたしか「大井休息所」とあった。テントが張れるなら、今日は

そこで泊まるう、と心積もりしていた。ならば日のくれる前に、とあたふたと坂を下る。

林を抜けたところにまだ新しい砂防ダムがあり、さらに下ると神社があった。神社の横に、屋根付きのコンクリートのテールがある。これが休息所？と首をひねるが、いずれにせよここでは泊まれない。神社では民家も近いことから、先程の砂防ダムまで戻り、コンクリートの平らな所を見つけ、テントを張った。防水のためのフライシートは持参していないので、雨の降らないことを、ひたすら祈るばかりだ。

固形燃料でみそ汁を作り、食料品店で買った巻き寿司をほうばった。あとは日の暮れないうちに急いで日記を書き上げる。暗くなる前に寝袋にもぐりこんだ。時刻は、まだ6時半。

5月1日 晴れ後薄曇り
昨夜はあまり寝れなかった。寝床が堅すぎたのだろう。おまけに風が時々強く吹き、その度テントがふわふわと浮き上

がりそうになる。下がコンクリートなので、ペグを打ち込んでいないのだ。1m横はすぐダムへ落ち込んでいたので、その度ひやりとした。

5時半にはテントを撤収し、歩き始めた。道を下りきり、まだ眠っている村を抜け、広い川を渡ると、また山道となった。しだいに道は急勾配となり、コンクリートの丸太の階段が、果てるともなく続いた。結局、朝一番(納経所は7時から)に入れると思いきや、8時をだいぶん回ってから、ようやく第二十一番太竜寺に着く。ここは「西の高野山」と呼ばれるだけあって、かなりの規模だ。ふもとからのロープウェイの便もあるらしい。

ここから第二十二番平等寺までの11キロは、やたらに長く感じた。汗をかくなのか、水ばかり飲んでいる。平等寺には弘法大師が掘ったと言われる井戸があり、ありがたく水を補充させてもらった。納経が終わった後、ベンチでしばらく考える。次の第二十三番薬王寺までは、ここから21キロ。こ

れを歩くとして、今日こ
こまでの距離を加えると、
本日一日の歩行距離が40
キロを越えることになる。
一日の距離にしては、少
しきつい。かといって、途
中、宿の情報もなく、テン
トを張るにも、地図から
は適当な場所が予測でき
かねた。まあ、何とかなる
だろう、と腹をくくり、薬
王寺のすぐ近くにある
「日和佐ユースホステル」
を予約した。6時着目標
(ユースの夕食時間を考え
て)として、今が1時半だ
から、えーと、4時間で21
キロということは、時速

5キロで歩かねばならな
い！そう考えるとため息
が出た。

平等寺から道はやがて
国道55号線に合流した。
片道2車線の、ほとんど
車のためだけの道だ。集
落からは離れていて、高
速道路の側道を歩いてい
るような錯覚に陥る。足
の痛みも限界に近づいて
いた。時々地図を見ては、
あと15キロ、あと10キロ、
と何度も地図を確認をし
た。最後の5キロぐらい
からが、一番つらかった。
残りの距離が無限のよう
に感じてしまう。ふと、昔

読んだ「ウサギは亀に永
遠に追いつけない」とい
うロジックを思い出した。
先頭を走る亀にウサギが
追い越しをかけようとす
る。ところが、ウサギが亀
の先ほどいた所に着いた
ころには、既に亀は以前
より前に進んでいる。こ
こからまたウサギが亀の
いた所にたどり着くと、
またその時間には亀はわ
ずかでも前に進んでいる。
こうして、ウサギは亀の
いたところにたどり着く
度、亀はわずかでも前に
進む。つまりその分だけ、
ウサギは永遠に亀に追い



着けない……。話だけ聞いてると、なるほど、と思えてしまう。今でもこのロジックの誤りが私にはわからない。現に今、同じような苦しみを味わっている……。しかしこの論理は、無事私がユースにたどり着けたのだから、やはりどこかに間違いがあるのだろうか。

昔ながらのユースで、若い人の中に混じって夕食を済ませた。さすがにミーティングは遠慮させてもらい、早々にベットにもぐりこんだ。少し汗くさいような気もしたが、さほど気にもならず、すぐ眠りに落ちてしまった。

5月2日 晴れ

朝まで熟睡。一昨日、あまり眠れなかったせいでろろ。7時半、食堂に出ると既に朝食が始まっていた。片付け後、衣装をととのえユースを出る。さわやかな朝だ。

ユースからほんの5分足らずの所に、国道を挟んで第二十三番薬王寺がある。厄よけのお寺として有名とのことだが、石段に1円玉が点々と置か

れている意味が分からない。踏まずに登るのに気を使ってしまった。

お参りをすませてから、納経所でこの先の道を教えていただく。ここから第二十四番最御岬寺までは、90キロ近くあり、通常3日がかりの道のりと聞いていた。納経所の案内では、途中適当な宿となると、三分の一ほどの所に番外霊場鯖大師があり、ここからは国道55号線を一本道、とのこと。今日一日、また昨日と同じ単調な車道か、とうんざりする。残念ながらわき道は無いとのことだった。鯖大師にも電話予約のついでに同じことを聞くと、「まずは国道を来られた方がよろしいでしょう。」との答えだった。

薬王寺を出て、とにかく国道を進む。鯖大師までどこでどう間違ったのか、18キロ足らずと勘違いし、(後に調べたら27キロ程あった。)18キロなら早く着き過ぎてしまう、と考え、今日はのんびり歩くことにした。歩調を落とすと、周りの風景も目に入ってくる。それでも始めは楽しんで眺めて

いた風景も、やがてまた足の痛みに負けて、どうでもよくなってしまう。靴のことを後悔するがもう遅い。所詮、軽登山靴はアスファルトの道には向いてないということか。

鯖大師までの残りの距離が短くなるのに反比例し、気持ちはずんずん落ち込んでくる。一体、何のために私はお遍路なんかしているのだろうか？足の痛みと食べることにその日のねぐらの心配ばかりの毎日なんて、悟りどころか、旅を楽しむ事にも程遠い……。最後のトンネルでは、ほとんど半べそその心境だった。出口を抜けると、やお寺の屋根が右手に見えた。這々の体で番外霊場鯖大師に到着する。

お参りの後、隣接した「へんろ会館」で宿泊の手続きをとった。随分立派な宿坊だ。さっそく風呂に入り、コインランドリーで洗濯をすませた。6時に全員食堂に集合、とのアナウンスがあり、あわてて食堂に行く。全員がそろった所で若い僧のリードで「般若心経」が始り、この後、やっと食事

にありついた。やはり民宿のようにはいかない。それでも食事の内容はなかなか立派なものだった。

たまたま前に座った男性と挨拶を交わすうち、同じ歩き遍路だと分かる。彼も区切り打ちをしていて、今回で3度目、薬王寺から今回は歩いて来た、と言う。同じ関

西、同じ年代とあって話が弾んだ。

焼山寺への山越えの話から例の熊さんの話題となり、私に彼のことをどう思ったかと聞く。あの時の事をありのまま話し、逆に彼の「熊さん像」を聞いてみた。

「僕は尊敬しています。：：。ただ、うわさでは、あの辺りに山賊が出る、と言う話もあるので、あなたの場合はどうだったのかと思って・・・。」

人それぞれが熊さんを鏡として見るのでは、と答える。あの風体なら、山賊と見る人はそのように

見えるだろう。彼の狂気じみた生き方も、固定観念に縛られた人なら、危険人物として見えてもおかしくはない。

食事の後、足のまめによく効く軟膏があるので、と彼が薬を持って部屋を訪ねてくれた。(前回のまめが完全に治りきらない

二人とも参加してくださいね。」

と言われる。「起きられるかなあー。」と、とぼけると

「起きられます。今からすぐ寝てください。」と手厳しい。やっぱり宿坊は民宿とは違う。これを潮時に彼は部屋に戻っ



うちに、既に新しいまめ

ができていた。(「京都無二膏」と書かれた缶を開けると、昔、子供のころ見た記憶のある、コールタールそっくりな練り薬だった。試しに、と少し分けていただき。二人で話し込んでいるところに、

部屋に係の女性が来て、「明朝5時半のお勤め、お

た。

日記を大急ぎで書く。願わくは足のまめが明日までには楽になりますように！祈りながら床に就いた。